

二〇二〇年度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

(二回)

国語

注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は□一から□三、2ページから19ページまであります。
合図があったら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

□ 次の文章は、ケラーが書いた、マクリントック（一九八三年ノーベル生理学・医学賞受賞）の伝記『動く遺伝子』を読んだ筆者が自分の思いを述べた文章である。この文章を読んで、後の一から八までの各問いに答えなさい。

（ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。）

① 私がここで驚いたのは、彼女が「トウモロコシ」を使って、それを顕微鏡で覗くことだけで、「遺伝子の転移」という現象を発見したくだけりである。当時の顕微鏡で見えるのは、染色体までであって、その内部にある遺伝子までは、想定はできていたが、「見る」ことはできなかった。しかし、彼女はこの時点で、誰もが見ることのできなかった、また見えるはずのないトウモロコシの遺伝子を「見た」のである。いったいどのようにしてか。彼女はどんなことをしたのか。

彼女は最初は、トウモロコシの葉や穀物に現れる色の模様や特徴を、染色体とのかかわりにおいてどうなのかを観察していた。その手段として、トウモロコシの花粉にX線を当てて受粉させ、そこから生じる染色体の位置の転移、逆位、欠損の状態を調べていた。なぜX線なのか。X線は、染色体上のさまざまな切断を引き起こすことがわかっていたからだ。その結果を調べていくうちに、染色体が、その切断されたものから、新たな融合や架橋を作り出すことを知ることになる。そして実はこの「切断—融合—架橋」といったサイクルが、トウモロコシのすべての細胞において、何度も起こっていることを彼女は発見することになるのである。そしてさらに、この「切断—融合—架橋」のサイクルが、多くのトウモロコシの変異を生み出すことにつながっていることも知ることになる。

この研究は一九三八年から論文で発表されていた。しかし、研究の成果は認められなかった。伝記は女性の研究者であるということの不当な扱いを描くとともに、②マクリントックならではの研究方法が、一般の科学者に受け入れられなかった経緯を説明している。ここで、私が示せるのは、専門の生物学の難しい研究史のほうではなくて、彼女の「トウモロコシ」との独特のかかわり方のほうである。彼女は「トウモロコシ」との出会いのなかで、誰もが気がつかなかった「遺伝子の動き」を知ることになる

からである。

マクリントックは、③周りの研究者たちが、「トウモロコシ」を「物」のように扱って、定量的な解釈をすることに批判的であった。「彼らはあまりにもすべてを数式化するのにとらわれている」と。彼女が実践してきたことは「それぞれ違っているトウモロコシの一粒一粒を見て、これを理解できるものとする事」であった。彼女は、

「一つ一つのトウモロコシはすべて違っている」

「どんなトウモロコシをとってもまったく同じものは一つとしてありません。みな違っています。私たちはその違いがわかっていなければなりません」

と言っていた。彼女は、トウモロコシを観察するのに、自分でその種を蒔き、自分で育てたものを観察し、その「一本一本の違い」を意識しながら研究をしていたのである。同僚の中には、彼女が、自分の研究しているトウモロコシ一本一本の「伝記」が書ける、と言ったことを覚えている人がいる。こうして一本一本のトウモロコシの違いを大事に見ようとする姿勢のなかから、関心がトウモロコシのより内部へと進んでゆくことになる。内部とは、トウモロコシの染色体の性質と、その働きのぐあいである。彼女は、その染色体の研究の当時の様子を、ケラーにこう語っていた。

「私の染色体とのつき合いがふえればふえるほど、染色体は大きくなり、仕事が核心をついている時には、私はまさに染色体のなかに入りこんでいました。私は染色体の一部だったのです。私は染色体と一緒に核のなかにあって、まわりのすべては大きく見えました。私には染色体の内部さえも見る事ができたのです。実際、すべてがそこにありました。本当にあたかも私がそこにいるかのように。そして染色体が友だちのように感じられたのは驚くべきことでした」

「私たちがこのようなものに接する時、それは自分の一部となる。そして④自我というものが消え去ってしまうのです。肝腎な点は私たちが自分というものを忘れることなのです」

マクリントックはこれをもっと簡単にこういう。「私はそこにはいない」と。自分で意識する「私」はただ消えてしまう。
(前出『動く遺伝子』)

神秘的な研究方法だと言えば、そう言えるのかもしれない。当時の男性の研究者たちには、とうてい理解できない研究方法と映ったことは確かである。「科学の方法では、本当の理解は得られない。生物との共感が必要だ」とマクリントックは言っていた。彼女はそれを「生き物との共生」と考えていたようだ。そんな「方法」で染色体の内部に入りこみながら、当時の顕微鏡では「見えなかった」遺伝子・DNAの動きを察知することになる。彼女はその観察から、「遺伝子が動く」ということを発見する。「転移する遺伝子」の発見である。当時⑤ワトソンとクリックによって発見されたDNAの二重らせん構造は、セントラル・ドグマと呼ばれ、生き物の核心の部分で生物を複製し、支える精密なコピー機構として想定されていた。それがもし「動く」ような仕組みをもっていたら、正確な複製ができなくなり、大変なことになってしまう、と男性研究者たちは考えていた。だからそんな「動く遺伝子」のことを発表するマクリントックは「気がふれたのか」と言った研究者もいたらしい。

(中略)

しかし、時代はしだいに彼女の発見した「転移の機構」が、遺伝子そのものの中に存在することを認めざるをえなくなっていくのである。ここで、私たちは、専門の生物学から離れて、少し自由に生き物の変化のしかたについて想いをめぐらせてみたい。生き物がもし、ワトソンとクリックの言うような、正確に複製するDNAの機構をもっているだけでしたら、多種多様に変化する生き物はなかなか生まれにくいように思われる。そして、もし生まれるとしても、それは複製の異常というか、複製の突然変異と考えるしかなくなるのである。しかし、マクリントックのように考えれば、DNAはその仕組みそのものが「転移」として存在していて、だから生き物は絶えざる「転移の選択」を生きているのだということになる。その日常的に選択される「転移」の多くは、ほとんどが形態に変化をもたらさないものだが、たまには変化をもたらす「転移」になる場合も出てくる。それを、

医者は「染色体異常」という言い方で「病気」扱あつかいしてきているが、マクリントックの「転移」観からすれば、そういうことが起こることは、人間が規定したがっているほど「異常」でもないということになる。

事実、こうした「転移」が自然に起こることで、進化と呼ばれる生き物の形態変化が実現されてきたわけで、そういう進化の過程を医師たちは「染色体の異常」とは言わないはずである。ところが、人間の子どもの生まれる過程でそういうことが起こると、「染色体異常」と呼び、異常視する習慣が今でも根深く残っている。⑥私はこの呼び方がなんとかならないものかとずっと考えてきている。

マクリントックは、ある意味では自然のもつありのままの仕組みを取り出そうとしていただけだったのかもしれない。彼女はこんなことも言っていた。「どんなことを考えついでみたところで、それはもともと自然のなかに存在していたものなのです」。私がマクリントックに注目したのは、彼女の発見が「トウモロコシ」という植物を通して実現されたということについてだった。彼女は植物についてこう言っていた。「植物が、あらゆる種類の感受性をもっていることは疑問の余地がありません。そしてとりまく環境かんきょうに対してさまざまな反応を示します。われわれの考えの及およぶほとんどすべてのことが可能です。しかしただじっとしているために、道をゆく人の植物に対する目の注ぎ方は、植物が本当に生きていないかのようであり、まるで生命の通っていないものに対するときと同じなのです」と。そしてケラーは、伝記の最後のほうでこういうふうに書いていた。

マクリントックが同僚どうりょうたちよりも遺伝の秘密により深く立入ることができたのはなぜか？

彼女の答えは単純である。繰くり返かえし彼女が語っているのは、⑦私たちは時間をかけてものを見なければならぬ、そして「自分の扱あつかっている対象が語りかけるところに耳を傾かたむける辛抱強しんぼうさを持たねばならぬ」、また「対象のほうからわれわれを訪れるようにさせる」開かれた心を持たなければならぬ、とりわけ「生物と心が通い合っていないければならぬ」ということである。

〔注〕 * 1 染色体 || 生物の体を作り上げている細胞の核の内部にあり遺伝情報に関するもの。

* 2 X線 || レントゲン線。

* 3 染色体の位置の転移、逆位、欠損の状態 || それぞれ染色体の異常の一つ。

* 4 架橋 || ここでは、橋を架けたような結合を作ること。

* 5 サイクル || 循環。ここでは一定の動きを周期的に繰り返すこと。

* 6 DNA || 遺伝情報を持つ遺伝子の本体。

問一 —線①「私がここで驚いたのはくを発見したくだりである」とありますが、筆者はどういうことに驚いたのですか。その説明として最も適当なものを次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大がかりな装置を用意するのではなく、たった一つの顕微鏡という身近なものだけで発見したということ。

イ 科学的に解釈するのではなく、対象物の自然な姿を丁寧に読み取っていくことで発見したということ。

ウ 他の研究者との共同研究という方法をとらずに、たった一人で対象物と対話しながら発見したということ。

エ データに基づいて実証していくのではなく、自らの目を信じて感覚的に捉えて発見したということ。

オ 生き物の核心部分を専門的に追究していくのではなく、日常的な観点で捉えて発見したということ。

問二 —線②「マクリントックならではの研究方法が、一般の科学者に受け入れられなかった」とありますが、一般の科学者とマクリントックの違いの説明として最も適当なものを次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一般の科学者は冷淡な態度で研究に臨み、マクリントックは愛情をもって対象物に向き合った。

イ 一般の科学者は客観的な態度で研究に臨み、マクリントックは主観的な態度で研究に臨んだ。

ウ 一般の科学者は一律的に対象物を捉えようとし、マクリントックは個別に対象物と向き合った。

エ 一般の科学者は大雑把なものの捉え方をし、マクリントックは緻密なものの捉え方をした。

オ 一般の科学者は大枠を見てから詳細を押さえ、マクリントックは詳細部分から大枠を推測した。

問三 —線③「周りの研究者たちが、『トウモロコシ』を『物』のように扱って」とありますが、これに対してマクリントックの場合はトウモロコシを「物」ではなく、どのようなものとして捉えていますか。「くもの」に続く形で十六字の部分をこれより後の段落から探し、そのまま抜き出しなさい。

問四 —線④「自我というものが消え去ってしまうのです」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 対象物の方から自分に強く働きかけてくることで、いつの間にかその現象に巻き込まれていくということ。

イ 自分が対象物を支配していくのではなく、逆に対象物からの語りかけで対等の立場になるということ。

ウ 自分が対象物と真剣に向き合うことで、対象物以外のものがまったく目に入らなくなるということ。

エ 対象物は流動的なものであるため、自分のペースもいつの間にか崩されていってしまうということ。

オ 対象物を対象物として眺めるのではなく、自ら深い関心を寄せることで対象物と同化するということ。

問五 —線⑤「ワトソンとクリックによって発見されたDNAの二重らせん構造」とありますが、この発見内容に関わる筆者の考えとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア DNAの二重らせん構造に基づけば、生物の進化というのにはあり得ないと言えるのではないか。

イ DNAの二重らせん構造に基づけば、生物の変化の原因は遺伝的要素が強いと言えるのではないか。

ウ DNAの二重らせん構造に基づけば、生物の変化は時間をかけて起こるものだと言えるのではないか。

エ DNAの二重らせん構造に基づけば、生物の変化というのは考えにくいと言えるのではないか。

オ DNAの二重らせん構造に基づけば、生物の種類は一定であり続けると言えるのではないか。

問六 —線⑥「私はこの呼び方が考えてきている」とありますが、なぜそのように考えているのですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生物は形態変化しながら生き続けているのに、過去の結果にこだわらずそれを理解しないのは常識外れだと思っているから。

イ 科学の進化で物事の多様性が発見されているのに、未だに異常という差別用語を用いるのは時代遅れだと思っているから。

ウ 内容に着目すべきなのに、女性が発見したというだけで転移という考え方が認められないのは差別的だと思っているから。

エ DNAは多様な形態を持つのに、本来一定のものであるという考え方は自然界に対する誤った認識だと思っているから。

オ 染色体の変化は起こりうるものであるのに、特定の形態上の変化だけを異常視するのは間違っているから。

問七 —線⑦「私たちは時間をかけてものを見なければならぬ」とありますが、時間をかけて見ることのできるようなことが可能になりますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自然のもつありのままの仕組みを捉えること。

イ 自然界における一つ一つの役割を確認すること。

ウ 他の生物と人間は差異がないということに気づくこと。

エ 自然が人間に与える影響の大きさを実感すること。

オ 自然は人間の意のままにならないということを知ること。

問八 マクリントツクの、生物を研究する上で大切にしている根本的な考えとはどのようなことですか。本文全体を踏まえ、マクリントツクの生物に対する見方に触れながら、六十字以内でまとめなさい。

② 次の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

高校一年の給前志音は、父親を中学生の時に亡くしている。幼稚園からの親友だった青山瑠璃と別々の高校に進学してから、志音は毎日昼休みに屋上に行き、一人で弁当を食べている。一方、吹奏楽部の部長の日向寺大志は、ある日屋上でドラムを叩くような動きをしていた彼女を吹奏楽部に勧誘しようと思いついていた。

母が持たせてくれた弁当箱を開ける。今日のおかずは醤油の入った茶色い卵焼きと、焼き鮭。

その瞬間、多分、一年くらい忘れられないあの声が出た。

「やっぱりここかあっ！」

箸を落としそうになった。

彼は梯子から顔を出し、昨日と同じように志音を見ていた。

① 耳が熱くなった。

「いいところで弁当食べてるじゃない。俺も一緒に食っていい？」

そう言っつて、安息の場に足を踏み入れようとす。ああ、ここも駄目だった。奪われた。眉間に皺を寄せて、広げたばかりの弁当箱をしまう。出来ることなら、死ぬまで顔を合わせたくなかったのに。

「一緒に飯食う友達、いないの？」

志音から少し距離を取って彼は腰を下ろした。弁当を広げ、本気で志音と一緒に昼ご飯を食べるつもりだ。場所を変えようと腰を浮かせた瞬間、白米を口に運びながら彼は言った。

「まだ学校始まってから一週間だし、スロースターターには厳しい時期だよな。仲良しグループとかできちゃって」

言葉の端々がちくりちくりと胸に刺さる。②思わず、浮かせた腰を元に戻した。

「いきなりよく知りもしない奴と仲良くしろ、なんてできない奴だっているよ」

そうだ。そうなのだ。知らぬ間に仲のいいグループができあがっていく。自分はその輪に入っていくのが他の人より遅い。踏み込めないでいる間に、志音が入るスペースはなくなってしまう。中学一年のときもそうだった。けれどあの頃は、教室は違えど同じ学校に瑠璃ちゃんがあった。

「気の合う奴ってのは、どんなに時間がかかっても自然と引き合うもんだって」

確かに自分にもそう思っていた頃があったはずだ。小学校では、中学校では、きつと瑠璃ちゃん以外にも友達ができるはずだと。

③高校でこそは、とは微塵も思わなかった。

「弁当、食わないのか」

箸を持ったきり動かない志音の右手に、彼の視線が注ぐ。仕方なく、箸の先を卵焼きに突き刺した。醤油味の卵焼き。少し黒ずんだ黄色。味が濃くて冷めても美味しいのが母の自慢だ。

「卵焼き入ってるな。甘い奴？ しょっぱい奴？」

突然そう言つて、彼は自分の卵焼きを箸で掴んで志音に見せた。

「俺、醤油とか出汁で作るしょっぱい卵焼きが好きなんだけど。うちの家族は全員甘い卵焼きが好きで、絶対に弁当に入れてもらえないのよ」

答えない志音に、彼は苦笑いを向ける。そして④短く息を吐いて、少し頬に力を込めたのがわかった。遠回りはやめた。直球で行こう。そんな顔だ。

「弁当、ずっとここで食べるの？」

雨の日も、風の日も？ ひどく悲しい顔で、彼は志音を見る。まるで自分自身が雨に打たれて弁当を食べているのを想像しているようだった。

「部活は無理つて言つてたけど、他に何かやりたいことでもあるの。バイトとか」

もしあるなら、もう誘うのは止めるよ。続けて発せられたその言葉に、胸が痛くなった。この言い方、覚えがある。父だ。懐かしさと同時に、憎らしささえ覚える。大志を抱いて生きる。その言葉は確かに志音に届いた。志音を貫いて、大きな大きな、修復しようのない穴を開けて、どこかに行つてしまった。

「別に、ないです」

卵焼きを持ち上げたまま、食べるでもなく弁当箱に戻すでもなく、くるくる回す。

「吹奏楽部に、ほんのちよつとでもいいから、興味はない？ 昨日も言った通り、うちの部には打楽器が必要なんだ。けれど人数が少ない。吹奏楽つてさ、どうしたって人数で勝負つて部分があるんだ。うちの部はその点では、スタートからめちやくちや不利なわけ」

そこでだ。⑤声のトーンが上がった。

「うちの部にドラムを叩ける奴がいればどうだろうつて考えた。そして昨日、君を見つけた」

まさにこれは運命なんだよ、とでも言いたげな、キラキラした目。

「シンバル、バスドラ、スネア。一人で出来る奴がいれば、演奏に厚みが出る。強い演奏になる」
気がついたら、彼がさつきよりずっと近くに来ていた。弁当を床に置いて、志音の顔を覗き込む。後退りすると、また一步近づいてくる。また後退ったら、給水塔の柱に頭をぶつけた。衝撃で箸から卵焼きが膝の上に落ちた。

「大丈夫？」

笑い混じりに聞かれる。答えられないのは、痛みのせいだけじゃない。

「ドラムはいいアイデアかもしれないですけど、誘う相手を間違ってます」

そんな言葉が口について出た。そうだ、間違っている。少なくとも、そういう誘いをする上で自分ほど相応しくない人間はいない。志音はスカートの上に落ちた卵焼きを見つめた。黒ずんだ黄色い卵焼きを。

「間違ってます」

「何がどう間違ってるんだ」

喰い込み気味にそう返される。

「少なくとも、うちの打楽器パートの奴よりドラムの技術はあると思う。入部しても、他の部員と仲良くやっていけないってことか？」

なら安心しろ。彼はそう笑って、自分の右手を差し出した。

「俺が君の、高校生活最初の友達になってやるよ」

俺達を助けてくれないか。そう言って志音に握手を求める。A自分と彼の間を風が吹き抜けていった。山から湖に向かって、鋭い風が。

「ごめん。なってやるよなんて、いくら先輩でも偉そうだな」

友達になつてください。

再び差し出される手を、その掌を、しばらく見下ろしていた。

(中略)

目の前には、瑠璃ちゃんのものとは似ても似つかない男子生徒の掌があつた。生命線が長い。大きくてごつごつとしているけれど、指が長くて爪が綺麗だ。

無意識に、箸を置いていた。あとちよつと、ちよつとだけ腕を上げれば、この手を取れる。Bそう思つたとき、風に揺れて箸がカチャリと音を立てた。

「⑥……ごめんなさい」

何とか、喉の奥から言葉を絞り出した。それでも彼は粘つた。手を差し出し続けた。けれども、志音の腕は上がらない。膝の上で石にでもなつたように動かない。

「残念だな」

そんな声と共に、手が引つ込む。俯いたまま、志音の目はそれを追つた。

その手が生徒手帳を掴んで、再び志音の目の前に現れる。一ページ目を広げてみせる。顔写真が貼られ、氏名、生年月日、住所、発行年月日がかかれていた。

「三年一組二十七番。日向寺大志」

⑦ああ、何て、何て名前だ。

「吹奏楽部の部長をやつてます」

にいつと歯を見せて、彼の手は、大志の手は、志音のスカートの落ちた卵焼きを拾う。ほんのり醤油の匂いがするそれを、ひよいと自分の口に放り込んだ。

「いいね、いいあんべえのしよつばさ」

お札にこつちをやるう。そう言つて、大志は逆さ箸で自分の卵焼きを志音の弁当箱に入れた。

「また来るよ」

残っていたおかずを一気に平らげて、大志は鞆を持つ。志音を見下ろして、笑つた。笑つたまま、梯子を下りていく。階段へ続くドアが開く音、閉まる音。階段を下りる音。どんどん、小さくなっていく。

屋上は変わらず風が吹き抜ける。山から湖に向かつて、迷うことなく流れていく。一人残され、志音は弁当箱を見下ろしていた。彼の卵焼きは、綺麗な、優しい優しい、クリーム色をしていた。

（ 『屋上のウインドノーツ』 額賀 滯 ）

〔注〕 *1 シンバル、バスドラ、スネア〓それぞれ打楽器の名称。

*2 あんべえ〓「あんばい」のこと。「あんばい」とは、ほどよい味かげんのこと。

問一 ―線①「耳が熱くなった」とありますが、この時の志音の様子を説明したものととして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いきなり聞き覚えのある声が聞こえて、なぜ自分の居場所がわかったのか理解できず恐怖にとらわれている。

イ 急に近づいてきた人物が、自分に残された唯一の居場所を奪ってしまうのではないかと不安になっている。

ウ 誰も来ないだろうと思つて安心していたのに、昨日から自分を探している人物が登場したためうろたえている。

エ 昨日と同じ人物に突然声をかけられて、びっくりしたはずみで、危うく箸を落としそうになったため怒っている。

オ 学校の中で落ち着ける自分だけの特別な場所に一人でいることを人に知られてしまつて、恥ずかしがっている。

問二 ―線②「思わず、浮かせた腰を元に戻した」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一度はこの場を去ろうと思ったが、志音が抱いている現在の生活への悩みを大志が代弁してくれたように感じて、大志の言葉の続きが気になったから。

イ いきなり登場した大志から離れようと立ち上がったが、大志に一方的に責められるだけでなく、逃げずに自分も何か言い返してやろうと思ったから。

ウ 大志からの勧誘を受けずにすむように屋上から逃げようと思ったが、自分の悩んでいることを言い当てられた驚きにより、大志と話したいと思うようになったから。

エ 大志と一緒に弁当を食べる気になれず、違う場所に行こうと思ったが、自分の悩みを理解している大志の話の続きを聞きながら一緒に弁当を食べたくなったから。

オ 他人とは関わらないように生活を送っている志音であったが、まるで自分の不満や悩みを解決してくれそうな大志の口ぶりに、話を聞いてもらいたくなったから。

問三 ―線③「高校でこそは、とは微塵も思わなかった」とありますが、なぜですか。その理由を「高校でこそは、」の後に省略されている言葉が分かるように四十五字以内で説明しなさい。

問四 ー線④「短く息を吐いて、少し頬に力を込めた」とありますが、この時の大志の気持ちとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア まわりくどい表現はやめようと決意したが、素直な気持ちで勧誘しても志音に入部を断られるのではないかと不安に思っている。

イ まずは志音の心を解きほぐそうとしたが、心を開きそうにないので、いつそのこと直接熱心に勧誘してみようと意気込んでいる。

ウ 志音の顔をうかがいながら言わなくても、まっすぐな気持ちで勧誘すれば、きっと入部してくれると自信に満ちあふれている。

エ 他者と関わろうとしない頑固な志音の心を動かすのは難しいが、何とかして勧誘して入部させようと部長としての責任を感じている。

オ ただの世間話では志音の反応が分からないので、吹奏楽部への勧誘に話題を変えようとするが、断られるかもしれないと緊張している。

問五 ー線⑤「声のトーンが上がった」とありますが、この時の大志の気持ちや様子の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どんなに良さを語っても入部しようとしないうちの頑固さにいらだちを覚え、怒りの感情が大きくなっている。

イ 吹奏楽部の魅力を志音に伝えようと話しているうちに、何とか共感してもらおうと熱い思いになっている。

ウ 吹奏楽部のことを最大限魅力的に説明することが、部長としての責任を全うすることだと力んでいる。

エ ドラムが入った演奏を思い浮かべて興奮し、吹奏楽部にとつていかに志音が必要かを伝えようとしている。

オ 人数が少ないことは不利だと弱音をはいたままだと印象が悪いので、大声で明るい話をしようとしている。

問六 ―線⑥「……ごめんなさい」とありますが、なぜ志音は^{しおん}大志の誘いを断ったのですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 志音は人付き合いを苦手としているため、大勢の人と一緒に演奏する吹奏楽部に^{すいそうがくぶ}入部して、新たな人間関係を構築するのに対してどうしても勇気が持てないから。

イ 志音は多くの人に注目されることが嫌なので、部長じきじきに誘われて入部した一年生として他の部員に興味を持たれることに対して何となく抵抗があるから。

ウ 志音は瑠璃以外の友達を作らないようにしているため、瑠璃と似ても似つかないような大志の手を取ってしまうことに対して迷いが生じているから。

エ 志音は人とかわかることに慣れていないため、大志の「友達になってやる」との言葉が信じられず、差し出された手を取ることに對して決心できないから。

オ 志音は他の部員よりもドラムの技術が高すぎるため、他の部員からの嫌がらせを受けるのではないかと入部することに対して恐怖を抱いているから。

問七 ―線⑦「ああ、何て、何て名前だ」とありますが、この時の志音の気持ちとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「大志」という名前が、かつて父親に持てと言われたのに未だ自分が持てないものと同じだったので焦っている。

イ 「大志」という名前を見て、「大志を抱け」と改めて大志に言われているように感じてしまい、うんざりしている。

ウ 「大志」という名前通りに志高く行動している大志と、志を持ってない自分を比較して、その違いにうろたえている。

エ 「大志」という名前が、どうしても父親の言葉を思い出させ、今の自分と向き合うことになりそうで、戸惑っている。

オ 「大志」という名前が、「志音」という名前と同じ「志」という字を使っていることを知って親近感を覚えている。

問八 波線A「自分と彼の間をく鋭い風が」、波線B「そう思ったとき音を立てた」とありますが、それぞれの「風」の説明と

して最も適当なものを次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 志音の決断が、結局は期待とは違ったことに対する、大志の残念だという思いを強調する働きをしている。

イ 大志と志音の考え方の違いは、時間をかけてもわかりあえるものではないという厳しさを表している。

ウ 大志の積極的な行動に押されてつい反応しそうになるが、踏みとどまる志音の冷静さを表している。

エ 志音が心を開こうかどうかためらっているところで、あと一歩踏み出すことを妨げる働きをしている。

オ 周りの様子は少しも変わらないのに、大志と志音の関わりはだんだん変化していることを暗示している。

カ 大志が熱心に説得しても志音には戸惑いがあり、いまだに二人の距離が開いていることを暗示している。

問九 この文章では、「卵焼き」が人物の心情を表現しています。「卵焼き」についての説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 孤独な志音のさみしさを表すような、醤油で味付けされた志音のしょっぱい「卵焼き」に対して、大志の甘い「卵焼き」は大志の優しさを表す。この二つの「卵焼き」を交換することで、二人の関係が近づくことを予感させている。

イ 大志は優しい色をした自分の「卵焼き」よりも志音の心の内のさみしさを表したようにしょっぱい「卵焼き」を好んでいる。この二つを交換することで、大志が強引に志音の心を開き、二人の仲が急激に深まることが暗示されている。

ウ 味が濃く、冷めてもおいしいという志音の「卵焼き」に対して、大志は自分の甘い「卵焼き」に不満を持っている。意志の強い志音にあこがれる大志が志音の「卵焼き」を食べ、少しでも志音に近づこうとしている様子が描かれている。

エ 大志は、志音の孤独を象徴するような黒ずんだ「卵焼き」を食べた上に、自分の甘い「卵焼き」を半ば強引に押し付けられた。大志の勢いに押し負けた志音が、優しいクリーム色の「卵焼き」を見つめたまま困惑する様子が描かれている。

オ 志音の黒ずんだ「卵焼き」は志音の心の辛さや暗さを表現しており、優しいクリーム色の「卵焼き」が示す大志の底抜け

の明るさと対比される。お互いたがの「卵焼き」を食べることで、相手の気持ちを理解しようとする様子が表れている。

☐ 次の―線部のカタカナを正しい漢字に直しなさい。(二画一画でいねいにはっきりと書くこと。)

- 1 日ひごろのごコウイいに感謝します。
- 2 エイキきを養やうう。
- 3 親おやコウコウなな娘むすめ。

座席番号			
—			
受験番号			
1	2		

氏名

得点
100 ※

一

問一
イ

問二
ウ

問三
あ
ら
ゆ
る
種
類
の
感
受
性
を
も
つ
て
い
る
もの

問四
オ

問五
エ

問六
オ

問七
ア

問八			
を	と	の	た
か	心	は	と
け	を	一	え
て	通	つ	同
観	い	と	じ
察	合	し	種
す	わ	て	類
る	せ	な	で
こ	て	い	あ
と	共	と	つ
。	生	考	て
	し	え	も
			同
	時	個	じ
	間	々	も

二

問一
ウ

問二
ア

問三		
る	っ	今
こ	た	ま
と	の	で
は	で	溜
も		璃
う	高	以
あ	校	外
き	で	の
ら	新	友
め	し	達
た	く	を
か	友	作
ら	達	れ
。	を	な
	作	か

問四
イ

問五
エ

問六
ア

問七
エ

問八
A
力

B
エ

問九
ア

三

1
厚意
2
英気
3
孝行

一 問一～問七各5点

問八12点

二 問一・二・四・五・六・七・九各5点

問三18点

問八各2点

三各2点